

# 春の鳥

国木田独歩

青空文庫



今より六七年前、私はある地方に英語と数学の教師をしていたことがございます。その町に城山しろやまというのがあつて、大木暗く茂つた山で、あまり高くはないが、はなはだ風景に富んでいましたゆえ、私は散歩がてらいつもこの山に登りました。

頂上には城あとが残っています。高い石垣いしがきに蔦つた葛かつらがからみついて、それが真紅しんくに染まつているあんばいなど得も言われぬ趣でした。昔は天主閣の建っていた所が平地になつて、いつしか姫小松まばらにおいたち、夏草すきまなく茂り、見るからに昔を

しのばす哀れなさまとなつています。

私は草を敷いて身を横たえ、すひやくねんおの数百年斧の入れたことのない鬱うつたる深林の上を見越しに、近郊の田園を望んで楽しんだことも幾度であるかわかりませんほどでした。

ある日曜の午後と覚えていますが、時は秋の末で、大空は水のごとく澄んでいながら野分のわけ吹きすさんで城山の林は激しく鳴っていました。私は例のごとく頂上に登つて、やや西に傾いた日影の遠村近郊をあかく染めているのを見ながら、持つて来た書物を読んでいますと、突然人の話し声が聞こえましたから石垣いしがきの端に出て下を見おろしました。別に怪しい者でなく三人の小娘が枯れ枝を拾っているのです。風が激しいので得物えものも多いかして、たく

さん背中にしよつたままなおもあたりをあさっている様子です。むつまじげに話しながら、楽しげに歌いながら拾っています、それがいずれも十二三、たぶん何村あたりの農家の子供でしょう。

私はしばらく見おろしていましたが、までもや書物のほうに目を移して、いつか小娘のことは忘れてしまいました。するとキャツという女の声、驚いて下を見ますと、三人の子供は何に恐れられたのか、枯れ木を背負つたままアタフタと逃げ出して、たちまち石垣しがきのかなたにその姿を隠してしまいました。おかしなことと私はその近所を注意して見おろしていると、薄暗い森の奥から下草を分けながら、道もない所をこなたへやって来る者があります。初めは何者とも知れませんでした、森を出て石垣の下に現われ

たところを見ると、十一か十二歳と思わるる男の子です。紺の筒ついで袖を着て白もめんの兵児帯へこおびをしめている様子は百姓の子でも町家の者でもなさそうでした。

手に太い棒切れを持ってあたりをきよろきよろ見回していましたが、フト石垣の上を見上げた時、思わず二人は顔を見合わしました。子供はじつと私の顔を見つめていましたが、やがてニヤリと笑いました。その笑いが尋常でないのです。生なまじろ白丸顔の、目のぎよろりとした様子までが、ただの子供でないと私はすぐ見取りました。

「先生、何をしているの？」と私を呼びかけましたので私もちよつと驚きましたが、元来私の当時教師を勤めていた町はごく小さ

な城下ですから、私のほうでは自分の教え子のほかの人をあまり知らないでも、土地の者は都から来た年若い先生を大概知っているの、今この子供が私を呼びかけたも実は不思議はなかったのです。そこへ気がつくや、私も声を優しゅうして、

「本を読んでいるのだよ。ここへ来ませんか。」と言うや、子供はイキなり石垣に手をかけて猿さるのように登りはじめました。高さ五間けん以上もある壁のような石垣いしがきですから、私は驚いて止めようと思っっているうちに、早くも中ほどまで来て、手近かっらの葛かに手が届くと、すらすらとこれをたぐってたちまち私のそばに突っ立ちました。そしてニヤニヤと笑っています。

「名前はなんというの？」と私は問いました。「六ろく」「六ろく？」「六ろく」

さんというのかね。」と問いますと、子供はうなずいたまま例の怪しい笑いをもらして、口を少しあけたまま私の顔を気味の悪いほど見つめているのです。

「いくつかね、年は？」と、私が問いますと、げげんな顔をしていますから、いま一度問い返しました。すると妙な口つきをしてくちびるを動かしていました。急に両手を開いて指を折って一、  
二、三と読んで十、十一と飛ばし、顔をあげてまじめに、

「十一だ。」と言う様子は、やっと五つぐらいの子の、ようよう数を覚えたのと少しも変わらないのです。そこで私も思わず「よく知っていますね。」「おつかさんに教わったのだ。」「学校へゆきますか。」「行かない。」「なぜ行かないの？」

子供は頭をかしげて向こうを見ていますから考えているのだと私は思つて待つていました。すると突然子供はワアワアと唾おしのよ  
うな声を出して駆け出しました。「六さん、六さん」と驚いて私  
が呼び止めますと、

「からす、からす」と叫びながら、あとも振りむかないで天主台  
を駆けおりて、たちまちその姿を隠してしまいました。

## 二

私はそのころ下宿屋住やどやまいでしたが、なにぶん不自由で困りま  
すからいろいろ人に頼んで、ついに田口という人の二階二間を借

り、衣食いつさいのことを任すことにしました。

田口というは昔の家老職、城山の下に立派な屋敷を昔のままに構えて有<sup>ゆうふく</sup>福に暮らしてましたので、この二階を貸し、私を世話してくれたのは少なからぬ好意であつたのです。

ところで驚いたのは、田口に移つた日の翌日、朝早く起きて散歩に出ようとすると、城山で会つた子供が庭を掃いていたことです。私は、

「六さん、お早う」と声をかけましたが、子供は私の顔を見てニヤリ笑つたまま、草ぼうきで落ち葉を掃き、言葉を出しませんでした。

日のたつうちに、この怪しい子供の身の上が次第にわかつて来

ました、と言うのは、ひつきよう畢竟私が氣をつけて見たり聞いたりしたからでしょう。

子供は名を六蔵と呼びまして、田口の主人にはあるじ甥におい当たり、生まれついでての白痴であつたのです。母親というは四十五六、早く夫に別れまして実家さとに帰り、二人の子を連れて兄の世話になつていたのであります。六蔵の姉はおしげと呼び、その時十七歳、私を見るところでは、これもまた白痴と言つてよいほど哀れな女でした。

田口の主人も初めあるじのほどは白痴のことを隠しているようでしたが、何をいうにも隠しうることでないのですから、ついにある夜のこと、私の室へやに来て教育の話の末に、甥おいと姪めいの白痴であること

を話しだし、どうかかしてこれにいくぶんの教育を加えることはできないものかと、私に相談をしました。

あるじ

主人の語るところによると、この哀れなきようだいの父親とい

うは、非常な大酒家で、そのために命をも縮め、家産をも蕩<sup>とうじん</sup>尽

したのでそうです。そして姉も弟も初めのうちは小学校に出して

いたのが、二人とも何一つ学び得ず、いくら教師が骨を折つても

むだで、到底ほかの生徒といつしよに教えることはできず、いた

ずらに他の腕<sup>わんぱくせいと</sup>白<sup>ちようろう</sup>生徒の嘲<sup>ちようろう</sup>弄の道具になるばかりですから、

かえって気の毒に思つて退学をさせたのだそうです。

なるほど詳しく聞いてみると、姉も弟も<sup>おとと</sup>全くの白痴であること

が、いよいよ明らかになりました。

しかるに主人あるじの口からは言いませんが、主人あるじの妹、すなわちきようだいの母親というも、普通から見るとよほど抜けている人で、二人の子供の白痴の原因は、父の大酒にもよるでしょうが、母の遺伝にも因ることは私はすぐ看破しました。

白痴教育というがあることは私も知っていますが、これには特別の知識の必要であることですから、私も田口あるじの主人の相談にはうかと乗りませんでした。ただその容易でないことを話しただけでよしました。

けれどもその後、だんだんおしげと六蔵の様子を見ると、いかにも気の毒でたまりません。不具のうちにもこれほど哀れなものはないと思いました。唾おし、聾つんぼめしい、盲などは不幸には相違ありません。

言うあたわざるもの、聞くあたわざる者、見るあたわざる者も、  
なお思うことはできません。思うて感ずることはできません。白痴と  
なると、心の唾おしつんぼめくら、聾、盲ですからほとんど禽きんじゆう 獣に類している  
のです。ともかく人の形をしているのですから全く感じがないわ  
けではないが、普通の人と比べては十の一にも及びません。また  
不完全ながらも心の調子が整うていればまだしもですが、さらに  
いびつになってできているのですから、様子がよほど変です、泣  
くも笑うも喜ぶも悲しむも、みな普通の人から見ると調子が狂っ  
ているのだからなお哀れです。

おしげはともかく、六蔵のほうは子供だけに無邪気むじやきなところが  
ありますから、私は一倍哀れに感じ、人の力でできることならば、

どうにかして少しでもその知能の働きを増してやりたいと思うようになりまして。

すると田口の主人あるじと話してから二週間もたった後のこと、夜の十時ごろでした、もう床につこうかと思つているところへ、

「先生、お寝やすみですか」と言いながら私の室へやにはいつて来たのは六歳の母親です。背の低い、瘦やせがた形の、頭ちの小さい、中なかだか高の顔、いつも齒を染めている昔ふうの婦人おんな。口を少しあけて人のよさそうな、たわいのない笑いをいつもその目じりと口元に現わしているのがこの人の癖でした。

「そろそろ寝ようかと思つているところです。」と私が言ううち、婦人は火鉢ひばちのそばにすわつて、

「先生私は少しお願いがあるのですが。」と言って言い出しにくい様子。「なんですか。」「六蔵のことでございます。あのようなばかりですから、ゆくさきのこと案じられて、それを思う私は自分のばかりを柵たなに上げて、六蔵のことが気にかかってならないのでございます。」

「ごもつともです。けれどもそうお案じなさるほどのことでもありますまい。」とツイ私も慰めの文句を言うのはやはり人情でしょう。

私はその夜だんだんと母親の言うところを聞きましたが、何よりも感じたのは、親子の情ということでした。前にも言ったとおり、この婦人とてもよほど抜けていることは一見してわかるほどですが、それがわが子の白痴を心配することは、普通の親と少しも変わらないのです。

そして母親もまた白痴に近いだけ、私はますます哀れを催しました。思わず私ももらい泣きをしたくらいでした。

そこで私は、六歳の教育を骨を折ってみる約束をして気の毒な婦人を帰し、その夜はおそくまで、いろいろと工夫を凝らししました。さてその翌日からは、散歩ごとに六歳を伴なうことにして、機に応じていくらかずつ知能の働きを加えることにいたしました。

第一に感じたのは、六蔵に数の観念が欠けていることです。一から十までの数がどうしても読めません。幾度もくり返して教えれば、二、三と十まで口で読み上げるだけのことはしますが、道ばたの石ころを拾うて三つ並べて、いくつだとききますと、考えてばかりいて返事をしないのです。無理にきくと初めは例の怪しげな笑い方をしていますが、後には泣きだしそうになるのです。

私も苦心に苦心を積み、根気よく努めていました。ある時は八は幡宮ちまんぐうの石段を数えて登り、一ひ、二ふ、三みと進んで七つと止まり、七つだよと言とおい聞かして、さて今の石段はいくつだとききますと、大きな声で十と答える始末です。松の並木を数えても、菓子をはうびにその数を教えても、結果は同じことです。一ひ、二ふ、三みとい

う言葉と、その言葉が示す数の観念とは、この子供の頭になんの関係をも持っていないのです。

白痴に数の観念の欠けていることは聞いてはいましたが、これほどまでとは思ひもよらず、私もある時は泣きたいほどに思い、子供の顔を見つめたまま、涙がひとりでに落ちたこともありました。

しかるに六歳はなかなかの腕わんぱくもの白者で、いたずらをするときはずいぶん人を驚かすことがあるのです。山登りがじょうずで、城山を駆け回るなどまるで平地を歩くように、道のあるところ無い所、サツサと飛ぶのです。ですからこれまでも、田口の者が六歳はどこへ行ったかと心配していると、昼飯を食ったまま出て日の

暮れ方になって、城山の崖がけから田口の奥庭にひよつくり飛びおりて帰って来るのだそうです。木拾いの娘が六蔵の姿を見て逃げ出したのは、きつとこれまで幾度となくこの白痴の腕白者におどされたものと私も思い当たったのであります。

けれどもまた六蔵はじきに泣きます。母親が兄の手前を兼ねておりおりひどくしかることがあります。手の平で打つこともあります。その時は頭をかかえ身を縮めて泣き叫びます。しかしすぐと笑っているさまは、打たれたことをすっかり忘れてしまったらしく、これを見て私は、なおさらこの白痴の痛ましいことを感じました。かかるありさまですから、六蔵が歌など知っているはずもなさそうです。知っています。木拾いの歌うような俗歌をそらんじ

て、おりおり低い声でやっています。

ある日私は一人で城山に登りました、六蔵を連れてと思いましたが、姿が見えなかったのです。

冬ながら九州は暖国ゆえ、天気さえよければごく暖かで、空気は澄んでいるし、山登りにはかえって冬がよいのです。

落葉らくようを踏んで頂に達し、例の天主台の下までゆくと、寂々せきせき

として満山声なきうちに、何者か優しい声で歌うのが聞こえます、見ると天主台の石垣いしがきの角かどに、六蔵が馬乗りにまたがって、両足をふらふら動かしながら、目を遠く放って俗歌を歌っているのです。

空の色、日の光、古い城あと、そして少年、まるで絵です。少

年は天使です。この時私の目には、六歳が白痴とはどうしても見えませんでした。白痴と天使、なんとという哀れな対照でしょう。しかし私はこの時、白痴ながらも少年はやはり自然の子であるかと、つくづく感じました。

今一ツ六歳の妙な癖を言いますと、この子供は鳥が好きで、鳥さえ見れば目の色をかえて騒ぐことです。けれども何を見ても

「からす」と言い、いくら名を教えても覚えません。「もず」を見ても「ひよどり」を見ても「からす」と言います。おかしいのは、ある時白さぎを見て「からす」と言ッたことで、「さぎ」を「からす」に言い黒めるという俗ぞくげん諺が、この子だけにはあたりまえなのです。

高い木のとつぺんで百舌鳥もすずが鳴いているのを見ると、六蔵は口をあんぐりあけて、じつとながめています。そして百舌鳥もすずの飛び立ってゆくあとを茫ぼうぜん然と見送るさまは、すこぶる妙で、この子供には空を自由に飛ぶ鳥がよほど不思議らしく思われました。

## 四

さて私もこの哀れな子のためにはずいぶん骨を折ってみました。目に見えるほどの効能は少しもありませんでした。

かれこれするうちに翌年の春になり、六蔵の身の上に不慮の災難が起りました。三月の末でございました、ある日朝から六蔵

の姿が見えませんが、昼過ぎになつても帰りません、ついに日暮れになつても帰つて来ませんから田口の家では非常に心配し、ことに母親は居ても立つてもいられん様子です。

そこで私はまず城山を捜すがよかろうと、田口の僕を一人連れて、ちようちんの用意をして、心に怪しい痛ましいおもいをいだきながら、いつもの慣れた小道を登つて城あとに達しました。

俗に虫が知らすというような心持ちで天主台の下に来て、

「六さん！ 六さん！」と呼びました。そして私と僕と、申し合  
わしたように耳をそばだてました。場所が城あとであるだけ、ま  
た捜す人が並みの子供でないだけ、なんとも知れない物すごさを  
感じました。

天主台の上に出て、石垣いしがきの端から下をのぞいて行くうちに、北の最も高い角かどの真下に六蔵の死骸しがいが落ちているのを発見しました。

怪談でも話すようですが、実際私は六蔵の帰りのあまりおそいと知ってからは、どうもこの高い石垣の上から六蔵の墜落して死んだように感じたのであります。

あまり空想だと笑われるかも知れませんが、白状しますと、六蔵は鳥のように空をかけ回るつもりで石垣の角かどから身をおどらしたものと、私には思われるのです。木の枝に来て、六蔵の目の前まで枝から枝へと自在に飛んで見せたら、六蔵はきつと、自分もその枝に飛びつこうとしたに相違ありません。

なきがら

死骸を葬った翌々日、私はひとり天主台に登りました。そして六蔵のことを思うと、いろいろと人生不思議の思いに堪えなかつたのです。人類と他の動物との相違。人類と自然との関係。生命と死などという問題が、年若い私の心に深い深い哀しみ<sup>かな</sup>を起こしました。

イギリスの有名な詩人の詩に「童なりけり<sup>わらべ</sup>」というがあります。それは一人の子供が夕べごとにさびしい湖水のほとりに立つて、両手の指を組み合わせて、梟<sup>ふくろ</sup>の鳴くまねをすると、湖水の向こうの山の梟がこれに返事をする、これをその童は楽しみ<sup>わらべ</sup>にしています。したが、ついに死にまして、静かな墓に葬られ、その霊<sup>たま</sup>は自然のふところに返つたというところを詠じたものであります。

私はこの詩がすきで常に読んでいましたが、六蔵の死を見て、その生しょうがい涯を思うて、その白痴を思う時は、この詩よりも六蔵のことはさらに意味あるように私は感じました。

石垣いしがきの上に立って見ていると、春の鳥は自在に飛んでいます。その一つは六蔵ではありませんまいか。よし六蔵でないにせよ、六蔵はその鳥とどれだけちがっていましたろう。

哀れな母親は、その子の死を、かえって子のために幸福しやわせだと言いながらも泣いていました。

ある日のことでした、私は六蔵の新しい墓におまいりするつもりで城山の北にある墓地にゆきますと、母親が先に来ていてしきりと墓のまわりをぐるぐる回りながら、何かひとりごとを言っている様子です。私の近づくのを少しも知らないと見えて、

「なんだってお前は鳥のまねなんぞした、え、なんだって石垣いしがきから飛んだの？……だって先生がそう言ったよ、六さんは空を飛ぶつもりで天主台の上から飛んだのだった。いくら白痴ばかでも、鳥のまねをする人がありますかね、」と言って少し考えて「けれどもね、お前は死んだほうがいいよ。死んだほうが幸福しやわせだよ……」  
私に気がつくや、

「ね、先生。六は死んだほうが幸福しやわせでございますよ、」と言っ

て涙をハラハラとこぼしました。

「そういう事もあります、なにしろ不慮の災難だからあきらめるよりいたしかたがありませんよ……」

「けれど、なぜ鳥のまねなんぞしたのでございましょう。」

「それはわたしの想像ですよ。六さんがきつと鳥のまねをして死んだのだか、わかるものじゃありません。」

「だって先生はそう言ったじゃありませんか。」と母親は目をすえて私の顔を見つめました。

「六さんはたいへん鳥がすきであつたから、そうかも知れないと私が思っただけですよ。」

「ハイ、六は鳥がすきでしたよ。鳥を見ると自分の両手をこう広

げて、こうして」と母親は鳥の羽ばたきのまねをして「こうしてそこらを飛び歩きましたよ。ハイ、そうして、からすの鳴くまねがじょうずでした」と目の色を変えて話す様子を見ていて、私は思わず目をふさぎました。

城山の森から一羽のからすが羽をゆるやかに、二声三声鳴きながら飛んで、浜のほうへゆくや、白痴の親は急に話をやめて、茫<sup>ぼ</sup>然<sup>うぜん</sup>と我れをも忘れて見送っていました。

この一羽のからすを、六歳の母親がなんと見たでしょう。





# 青空文庫情報

底本：「号外・少年の悲哀 他六編」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年4月17日第1刷発行

1960（昭和35）年1月25日第14刷改版発行

1981（昭和56）年4月10日第34刷発行

入力：紅 邪鬼

校正：LUNA CAT

2000年8月21日公開

2004年6月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 春の鳥

国木田独歩

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>